

寄稿 プーク人形劇場の歴史と世界の人形劇

プーク人形劇場支配人 伊井 治彦

プーク人形劇場は、日本で最初の現代人形劇専門劇場として、1971年に誕生しました。「人形劇団プーク」にとって、自分たちの人形劇場を作ることはまさに念願でした。「誕生記念フェスティバル」のパンフレットには、このような宣言が掲載されています。

「劇団創立以来42年間にわたる歩み—そのたたかひの中から、プーク人形劇場は生まれた—かつての夢は—今ここに現実となる。この劇場は、わたしたちのものであり、わたしたちだけのものではない—こどものためと日本のための人形劇芸術の砦として、この劇場を守り育てることこそ、わたしたちの仕事！わたしたちは誓う—人形劇を愛する日本中の、全世界の友人たちの熱い友情と励ましをおぼえながら—

1929年に誕生したプークは、第2次世界大戦中には、メンバー全員が逮捕され活動停止状態となった時もありました。戦後まもなく、現在の場所に稽古場と美術工房・事務所が同居した2階建て三角屋根の建物を建設し、活動を再開。それまではバス小屋で活動していましたから、「こんな大きなものを立ててしまったのか。」と、当時のメンバーは感無量だったそうです。

プークは、世界の人形劇との交流も開始しました。ところで、プークの国際交流活動は、北海道の人形劇運動と深い関係があります。

1957年のモスクワ世界青年祭。人形劇の専門家として参加したプークの川尻泰司一行の他に、旭川の松井恒幸さんが参加していました。この二人が一緒に参加したことは、その後の日本の人形劇の発展にとって運命的なものでした。この旅の中で、川尻は「劇場」の必要性を痛感。松井さんは「人形劇フェスティバル」への夢を、それぞれ胸に抱き帰国しました。

その後もプークは欧州各国の人形劇場を視察し、あるべき人形劇場の姿を具体化、建設計画を発表しました。

建設資金を5000万円と定め、「70%を自分たちで、残り30%を銀行とカンパから。」と、当時の劇団員は給料天引きの積立を始めました。劇団の年間収入は1600万円程。銀行は「無謀な計画だからあきらめた方がよい」と言っていたが、積み立てが2年3年とたまっていく様に感心し、融資は決定しました。

いよいよ建設かと思いきや、今度は東京都の非文化的な条例が立ちました。当時「劇場」は風営法の管轄にあり、キャバレー、バー、待合などの「風俗業」と同じとみなされていました。プークが立地している地域は、第二文教地区にあたり、ボーリング場は立てられても「劇場」は建てられないというのです。

この東京都の条例による非文化的な窮地を突破してくれたのは北海道の人形劇運動でした。モスクワ世界青年祭に川尻と共に参加した松井恒幸さんは、帰国後の1959年、第一回北海道人形劇フェスティバルの開催させる中心的な役割を果たしました。北海道フェスは毎年回を

重ね、人形劇運動はますます活発になっていきました。プーク人形劇場建設の窮地に、松井さんは、友人だった当時の旭川の五十嵐市長に斡旋を頼み、直接、都知事に「建設計画」を

届けることが出来ました。この斡旋のおかげで、都知事の「特別認可」を受け、劇場建設許可証を獲得できたのです。しかし、この特別認可までには2年もの時間を要し、インフレによって建設予算は1.5倍に膨みました。劇団員は積み立てを10%から35%に引き上げ、同時に全国各方面からも数えきれないほどの支援を頂き、ついに1971年11月26日プーク人形劇場は誕生しました。

プーク人形劇場は地上5階、地下3階。正面の壁には、プークのこれまでの歴史が刻まれています。当時の劇団員がノミと金槌で、歴史のレリーフを刻みました。翌年には年間二万人の来場者を記録しています。「子どもの殿堂」として、そして「人形劇のナショナルセンター」的な役割として、国際交流も盛んになりました。1972年から始めた「世界の人形劇シリーズ」は、これまでに24か国・57劇団に及びます。

ご存知のように、世界の人形劇はめざましく発展しています。「現代演劇表現の中で、最も発達した表現芸術は人形劇である。」(フランス国立人形劇高等学校(ESNAM)教授、ルシール・ボドゥソン氏の論文より)と評されるほどです。パントマイム・クラウン・ダンスといった人形劇以外の要素を加え、誰が人形で、誰が人形操作者なのか？と、息をのむような作品がたくさん誕生しています。

私が最近見た作品では、イタリアのZaches Theatreの「シンデレラ」。ダンスあり、人間と人形との共演あり、ブラックシアター・影絵・セットの使い方の面白さ。ガラスの靴を投げ捨て、お城から飛び出す様の格好のよいこと！「シンデレラに王子さまは必要ない！」と言わんばかりです。誰もが知っている物語も、いかようにも表現できる人形劇の素晴らしさを実感しました。

そんな中でも、複数の人形を同時に遣いながら、人形操作者も物語の重要な登場人物として劇に参加するネヴィル・トランターの作品は圧巻です。世界中の人形劇俳優に影響を与えた彼は、欧州ほとんどの国の人形劇高等学校で講師を務めています。本年夏、やまびこ座にもやってくる予定です。お楽しみに！

プークは、劇場を誕生させることで、国際交流の舞台と、自らの人形劇の実験場を手に入れました。そして人形劇を通じて「人と街、都市と世界をつなぐ」を合言葉にこれからも歩んでまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします

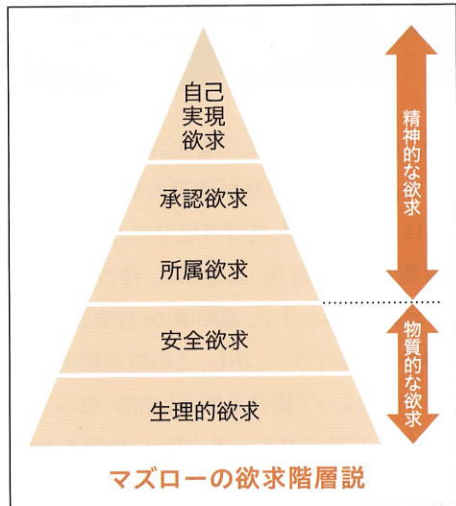
伊井 治彦(いいはるひこ)

1970年北海道釧路市生まれ。明治学院大学卒業。1994年人形劇団プーク入団。2012年プーク人形劇場支配人就任。「もりのへなそうる」脚色・演出、「ウクライナ民話よりてぶくろ」演出。2014年よりプークの「世界の人形劇シリーズ」を手掛ける。国際人形劇フェスティバル「A-hoj!」プロデュース。



子どものすこやかな成長を願って 小野寺 基史

本連載は「視点を変えてみよう」というコンセプトで、「自分の視点(目線)だけでなく、相手の視点(目線)からもものを捉えてみる。定点だけでなく、多面的、多角的な視点(目線)からもものを捉えてみる」をテーマに進めていきます。



今回は「マズローの欲求階層説」の話をしませす(上図)。一番下が「生理的欲求」、次が「安全欲求」です。この階層の重要なところは、生活の基本となる「食べる」「眠る」といった「生理的欲求」が満たされていること、そして、安心できる空間(安全基地)が家庭の中に確保されているかということです。最近では、保護者による虐待等で、家庭においてすら、生命の危機に

さらされている子どもたちがいることに心を痛めるばかりです。

「安全欲求」の次は「所属欲求」です。「所属欲求」は家庭や学校の中に自分の居場所があるかということ、次の「承認欲求」は、自分が誰かに「認められている」「愛されている」と実感できているかということです。そしてそれは「自分は誰かの役に立っている」という自尊感情にもつながっていきます。

さて、それを満たすための手立てはどうすればいいでしょう。決して難しいことはありません。「玄関の靴を揃える」「新聞をとってくる」「肩たたきをする」、子どもがお手伝いをして「ありがとね(あなたのおかげで)助かったよ。お母さん(お父さん、先生)は嬉しいよ」って。そうすると子どもは、人の役に立って褒められて、自分はみんなに認められている、居心地がいいなあって感じられますよね。そんな環境の中にいることが、子どもにとって一番幸せなのだと思います。子どもが幸せの種を獲得すると、あとは勝手にそれを成長させて、他の人に

もお裾分けして、結局、そのことで自分も幸せになっていく。子どもの幸せってそんなことなのかなあと漠然と考えています。子どもの幸せは親が決めるのではなく、子ども自身が決めることなのだと思います。もちろん、そのための種まきや手入れは親の仕事です。「もしも自分の子どもが植物だったら」ではないですが、親は子どものよき理解者、支援者になってほしいと願っています。

(参照)小野寺基史、デキる「指導者・支援者」になるための極める! アセスメント講座

小野寺 基史

(おのでもとふみ)

北海道教育大学 教育学研究科教職大学院特任教授
名寄市生まれ。北海道教育大学札幌分校を卒業後、小学校の教員、札幌市教育研究所・教育センター指導主事、のぞみ分校教頭、札幌市教育センター教育相談担当課長を経て、現職。学校心理士、特別支援教育士SV



ほん MA・SO・BO シェルジュ HON-CIERGE

本案内人「本シェルジュ」
厳選本の紹介
荒井さん編 ⑫

荒井 宏明(あらい ひろあき)

一般社団法人北海道ブックシェアリング代表理事
札幌大谷大学社会学部、東海大学現代教養センター講師
北海道子ども読書推進委員



『世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ』

編:くさばよしみ 絵:中川学 出版社:汐文社

この本に登場するホセさんを「南米の田舎でのんびりと暮らしているからそんな理想を語れるんだ」と勘違いした批評をする人もいますが、彼は混乱するウルグアイの社会抗争のなかで6回撃たれ、4回逮捕され、2回脱獄しています。1972年の逮捕後は13年近くの収監を耐え抜いた筋金入りの猛者なのです。そして収監し続けたウルグアイ軍部に報復しなかったことでも知られています。ウルグアイは1970年代の軍政による混乱があったものの、いまは従来の「南米を代表する民主主義国家」に戻っています。最新の腐敗認識指数(公務員と政治家が、どの程度汚職していると認識できるかを計測した数値)は世界14位、2022年で、日本(18位)より「健全な民主主義国家」なのです。



『おおかみこどもの雨と雪』(つばさ文庫)

著:細田守 挿絵:喜久屋 めがね 出版社:角川書店

この物語は、同名映画の原作として、監督の細田守さんが書き下ろしたものです。小説家の本業ではないのに、みずみずしい風景描写や、細やかで切ない心理描写が心に響いてきます。細田さんは、子どもの頃に吃音(きつおん、どもり)があり、小学校の1、2年は特別支援学級に通っていましたが、ひとと違うことを早くから気づかされていたのだと思います。この作品や大ヒット映画『サマーウォーズ』でも、社会に溶け込めなかったり、人との付き合いが苦手だったりするキャラクターを生き生きと描写する場面が数多くあります。おとなも子どもも同じように、誤解され、愛され、はじかれ、受け入れられながら生きているということを伝えてくれる素敵なお物語です。



『モモ』(岩波少年文庫)

著:ミヒャエル・エンデ 出版社:岩波書店

この物語はいま読むことに大きな意味があります。現在、日本では「タイムパフォーマンス」といって、いかに時間を削減するかがもてはやされています。この作品に登場する「時間貯蓄銀行から奪った時間で生きる灰色の男」を思い浮かべたひともいるでしょう。発表当時から「時間を切り売りして生きるライフスタイルへの警鐘」として「大人が読むべきファンタジー」の上位に挙げられることが作品ですが、じつは日本での人気が抜群に高く、本国ドイツの次に売れているのです。エンデ氏の風刺が鋭すぎて「読んでいてちょっと辛くなる」というおとなもいらっしゃいますが、そんなときこそ肩の力を思いっきり抜いて、時間と心に余裕を持って読み進めましょう。



お問合わせ
お申し込み

札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397
札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号
(地下鉄南線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

MA・SO・BOに関する最新情報、
MA・SO・BO通信のバックナンバーは
ホームページからご覧いただけます。



編集後記

2024年初めの自然災害、こんな胸の痛いお正月があるでしょうか。犠牲となられた方々にお悔やみ申し上げるとともに、被災者のみなさまに心からお見舞い申し上げます。東日本大震災からまもなく13年、かつて見たすさまじい光景が再び目の前に現れました。私たちにできることは? みなさん同じ気持ちだと思います。微力ですが文化の力で人々の生きる力を育むこと、信じて続けたいと思います。(柳本)